

クラブライフの提案

「みやび倶楽部」

目次

那須町とその周辺 「那須」のいみ

1：新幹線の新駅名をめぐる利害

1-1 地名問答

1-2 紛らわしい駅名が市のなまえに

1-3 黒磯駅までが JR 宇都宮線

2:自動車道 IC で挽回

2-1 自動車道の IC と那須町

2-2 温泉と奥州街道

2-3 あらためて那須町とは

3:那須の語源は地名 地名が国名になって氏名になった

3-1 「なか川の洲」説

3-2 那須氏のこと

3-3 蘆野氏のこと

3-4 芦野宿の保存

【那須町とその周辺「那須」のいみ】

1: 新幹線の新駅名をめぐる利害

1-1 地名問答

箱根は箱根町に、軽井沢は軽井沢町にあるし、小田急に乗って箱根湯本から、北陸新幹線で軽井沢駅から行ける。しかし那須の場合はそうはいかない。那須は那 須町にあるとは限らないし、新幹線の那須塩原駅は、もとは東那須野駅といって特急急行が停車することのない、旧西那須野町の外れの小さな駅であった。那須 に方角を付けたり、野や岳を付けて好き好きに用いる。もともと那須とは何なのだ・・・。

東北新幹線の開業は 1982 年。駅名の当初案は「新那須駅」だった。しかし、中曽根派の渡辺美智雄（元党政調会長）は「那須・塩原」、三木派の森山欽司（元運輸相）は「那須」、社会党の広瀬秀吉（国労出身・党県連常任顧問）は「那須野」。收拾に当たった栃木県知事の船田譲（同県知事 3 期）が「那須塩原」として、窓口である国鉄東京北管理局（局長・山之内秀一郎・後 JR 副社長）に提案した。山之内は「那須塩原駅」を採用、しかし黒磯市はあくまで「那須」に 固執、收拾未決であやうく首が飛びそうになったという。



図 46 現在の那須塩原駅



図 47 旧・東那須野駅 現那須塩原駅

（注）1966 年ごろの東那須野駅。駅名は東北新幹線が開業した 1982 年 6 月に「那須塩原」へと改称された（画像：JR 東日本）

出典：「乗り物ニュース」 <https://trafficnews.jp/post/82081>

現・那須塩原駅から北に 15～6 キロ離れた那須町（役場）はどういう思いで見えていたのであろうか。急行も止まらない東那須野駅は破格の「出世」を遂げた。しかし、その駅の「那須塩原」は、地誌歴史を反映したものではない。何を指して言うのか、その紛らわしさが、多くの人々に戸惑いを与えたに違いない。

結局、なにをもって那須とするかは、関係各位の那須とのかかわり方に帰着する・・・と思う。大正帝は西那須野駅から塩原御用邸に、昭和帝は黒磯駅から、そして平成帝は那須塩原駅から那須御用邸を訪れた。いずれも駅は那須町には所在しない。これをひと括りに「那須」と言ったら、帝たちはどう思われるだろう か。もっとも文武帝の頃の国名だからそれでよい、となるかもしれない。

那須を町名とする那須町は苦々しく思うであろう。町内には、那須御用邸と茶臼岳や朝日岳、その麓にある古来からの「鹿の湯」(那須温泉の源泉・旧江戸時代の湯本村)を抱え、町内の別荘は 9000 件を数える。駅の名前がどうなろうと盤石ではある。

1-2 紛らわしい駅名が市のなまえに

2005 年に 1 市 2 町(黒磯市、那須郡西那須野町、塩原町)が合併した。新市名を、新幹線の駅名にちなんで「那須塩原市」と決めた。もともと紛らわしい駅 名を市の名前のしたのだから、事情通でなければどこを指して言うのかわからない。むろん、那須町はまぎらわしいから「那須」という字を使うなと猛反対した。

那須町は合併に加わらなかったし、那須御用邸に通ずる道路は、本来、黒田原駅発であるべきだというであろう。1918 年、黒田原駅から鹿の湯まで鉄道敷設計画(那須電気鉄道)が策定され、1925 年着工したが、大東亜戦争体制で潰え、1938 年に敷設免許取消になった。那須町の庁舎は開通時の東北本線の旧黒田原駅跡というから、さらにややこしくなる。

そこで少々気になるのは、黒磯と黒田原の地名の由来である。ともに「黒」がつく。海でもないのに磯とはなにか。「村の創始者黒館五郎の黒と妻磯よしの磯」「那珂川の磯が黒」で黒磯、しかし黒田原は不詳だ。

1-3 黒磯駅までが JR 宇都宮線

東北本線の黒磯駅から白河方向に向かい、南から北に、那須町には、高久・黒田原・豊岡という、3 つの駅がある。御用邸・温泉神社は、東から西方向で、黒田 原駅から 16~7 キロ、黒磯駅からは 18~9 キロ、那須塩原駅から 24~25 キロ。クルマならともかく、人力なら黒田原駅からが有利なのだが、在来線時代 では永らく那須の入り口は黒磯駅ということだった。

しかし、これは東北本線の事情にも依る。ひとつは開業年の差。黒磯は 1886 年、黒田原はその 5 年遅れの 1891 年だが、しかしそれだけではない。黒磯か ら先は勾配がきつく補助機関車が必要であったので、路線を敷設し直した。現在の路線の開業は 1920 年である。また交流電力を使っている関係で、東京近郊 区間の電車は黒磯までである。同じ東北本線でも黒磯までは宇都宮線と称して運転系統を別にしている。

どうも、那須町の黒田原駅是那須の玄関になることに時宜を失し、旧黒磯市の黒磯駅にお株を取られ、いまの那須塩原市の那須塩原駅に引き継がれた感じた。

2: 自動車道 IC で挽回

2-1 自動車道の IC と那須町

しかしながら、東北自動車道の「那須 IC」はしっかり那須町高久甲に設置された。森の風まで 6~7 キロ、温泉神社・御用邸まで約 12~3 キロ、那須町のまんなかである。ほかに、「那須高原スマート IC」が那須町豊原に設置された。那須町役場まで 6 キロ、そして高原の北部をカバーする。

「黒磯板室 IC」の「板室」は高林村(旧黒磯市)にある那須十二湯のひとつだし、「西那須野塩原 IC」の西那須野は西那須野であって、那須ではないのだと 明解に言い切れるであろう。自動車の時代なので、「みやびの里」の会員はもとより、別荘所有者や観光客の多くに有益である。これで那須町としても永年にわたる鉄道の怨念は晴せたのではなかろうか。

一方、外部からは、「那須」という固有名詞が、その場に応じ、便宜的に使われる用語らしいと見える。「那須名産」とか「那須野が原」などというとき、その「那須」という言辭がなにを意味するするのか。必要に応じ、用心深く思慮すべきである。

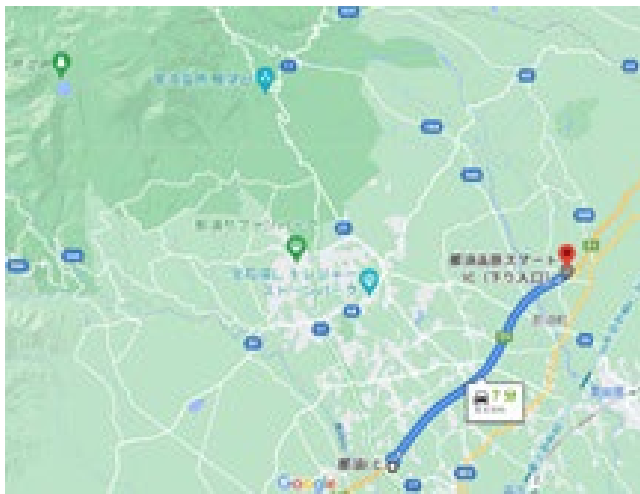


図 49 東北自動車道 IC と那須温泉

2-2 温泉と奥州街道

江戸期の奥州街道は五街道のひとつで、平安時代の律令制でいう東山道の一部で、鎌倉時代の鎌倉街道を前身とする。日本橋から白河に至る。宇都宮までは日光 街道と共用である。白河までが江戸幕府の管轄、奥羽の陸奥に至る白河から先は各藩の分担、陸羽街道とか松前道とかの呼称がある。

白河の関は下野・磐城の国境で、白河から北が奥羽、奥州になる。奥州街道における貧富の差を表す「白河以北一山百文」は、非公式な場でも下手に使うと今村雅弘をして復興相(当時)を辞任させる含意があるが、那須町は「下野」側にある。

下野国那須郡の奥羽街道には、21 番目の 佐久山宿(現・大田原市)、22 番大田原宿(同)、23 番鍋掛宿(現・那須塩原市)、24 番越堀宿(同)を経て、25 番目の蘆野宿(現・那須町)がある。この先から磐城国白河郡になり、26 番白坂宿、27 番白河宿になる。

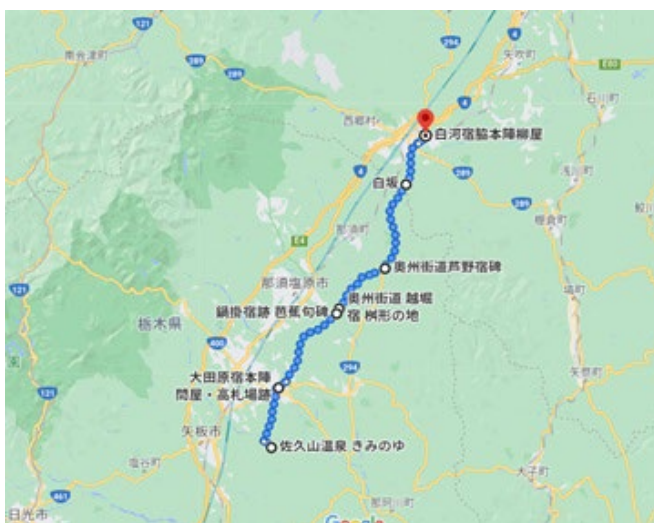


図 50 奥州街道概念図 GoogleMap で旧宿場跡たどる。(注)かならずしも正確ではない。



図 50 蘆野宿と白河関所の位置

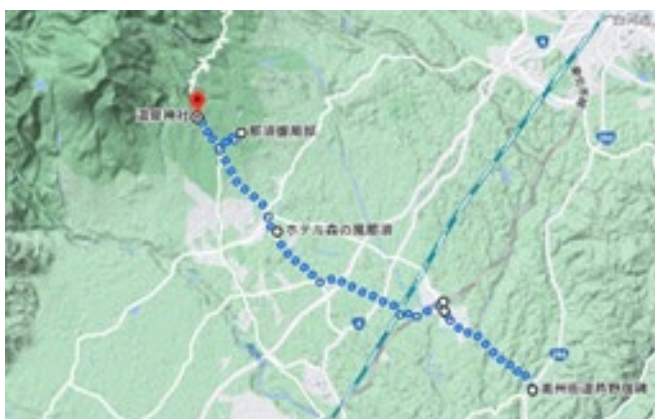


図 51 奥州街道蘆野宿跡から温泉神社への経路



図 52 那須湯元・温泉神社

2-3 あらためて那須町とは・・・

奥州街道は、東北新幹線や現東北本線よりも東側にある。那須町の宿場蘆野宿跡から温泉神社まで約 24 キロ。標高 256M から 821M までの上り坂である。奥州街道の那須郡下の宿場までたどりついたとしても、蘆野宿からだとまだ 24 キロの上り坂が残っていた。後年、東北本線が開通しても、この条件はさして変わらない。自動車が登場するまでは、人力か馬に頼る。街道側から温泉にたどりつく「湯道」の経路は無数にあり、主要なものは、路傍の道祖神などの文化財とともに、「鹿の湯ものがたり」に解説されている。

蘆野宿から白河宿に至る途中に白河関所があり、標高約 450M の山中を歩くことになる。江戸時代の白河は、奥州と関東をつなぐ重要な宿駅であり、一大拠点として栄えた。

以上のことから、那須町とは、関東の最北、奥州の入り口白河の南側に所在し、いわば東西に細長い区域を施政の対象にする。高低差があって、西の高地に那須 温泉・御用邸・高原別荘地を、東の平野部に奥州街道の蘆野宿をもち、那須塩原市とは那珂川で一線を画しており、鉄道には恵まれなかったが、自動車道の恩恵に浴している独特の地域であることがわかった。



図 53 那須湯元・殺生石



図 54 那須湯元・鹿の湯湯屋



図 55 那須湯元・鹿の湯入口

3: 那須の語源は地名 地名が国名になって氏名になった

3-1 「なか川の洲」説

江戸時代、那須郡は下野国に属する。由来があって、以下にささやかな記憶の範囲でメモする。むろん多くの異説があるが、あえてわかりやすいものを、恣意的に取り上げる。。

大宝律令前のはるかまえ4～5世紀、北関東の筑波山より内陸側に毛野国(毛の国)があり、真ん中に毛野川が流れていた。この川(いまの鬼怒川)の西側を上毛野国、東側を下毛野国というようになった。

さらにその奥、北方におおきな川があり、その川が陸地(いわゆる中洲)を造り、なかの洲を、那珂の洲、「なす」、「那須」と呼称したらしく、その周囲を那須国として統括した。その証拠は大田原市にある、飛鳥時代の石碑「那須国造碑」であり、国宝である。

そして、大宝律令の8世紀に、上毛野国は上野国、東側の下毛野国は那須国とあわせて下野国と整理された。那須国は律令国家としては消え去り、下野国那須郡になった。まだ藤原も不比等の時代で、この頃那須一族は存在しない。となれば、那須はもともと地名であり、一時期は国名になり、その後郡名に格下げされた。那須一族が那須という名前を称したのは、そのずっと後のことである。

3-2 那須氏のこと

那須氏の系図は11世紀から。2代目の那須与一(弓の名人として活躍)が著名である。鎌倉幕府では御家人、室町時代に関東八屋形(宇都宮・小田・小山・佐竹・千葉・長沼・那須・結城の有力八家)として並ぶ。しかし、お家騒動で没落、豊臣秀吉の小田原征伐に末裔の那須資晴は遅参し所領没収、家臣の大田原晴清が陳謝して5,000石を復活させた。関ヶ原では東軍に参軍し、下野那須藩1.4万石、ついで2万石下野国烏山藩に転封するも、またまたお家騒動で減封され3,500石となり、藩主から旗本・交代寄合に格下げされた。ただ交代寄合ではあるが、正規の「表向御礼衆」よりも一格下の、「四衆」の扱いであった。

家系は続くが、その末裔が「弘前大学医学部教授夫人殺人事件」の犯人に擬せられ、冤罪に巻き込まれるなど、不幸な一面もあった。

3-3 蘆野氏のこと

那須町の旧奥州街道にあった蘆野宿は、那須郡蘆野に3016石の領地をもつ蘆野氏の由来である。その蘆野氏も、江戸城内では、四衆(那須・美濃・伊那・三河)における那須衆のひとつとしての扱いを受けていた。

蘆野氏の源流は那須氏8代那須資忠の四男資方である。1568年に那須内紛にケリを付け、1590年の小田原征伐で豊臣に付き所領安堵された。また、1600年関ヶ原の戦いでは、徳川家康の東軍に参加し、上杉に備えるなどの功で2,700石、1615年大坂夏の陣で徳川方に参加、その功で交代寄合に列し、明治維新に至った。那須氏に比べ、分家筋の蘆野氏のほうが地味ながら無理なく続いてきた感じた。

3-4 蘆野宿の保存

那須町は、この蘆野氏の施政の遺物を、かなり丁寧に残している。別添の「奥州道中・蘆野宿早わかりMAP」とその裏面をご覧ください。

ひと区画を昔の儘にして観光施設にしようというのではなさそう。日常生活の中に、昔のモノは捨てずにおく方針のようにみえる、むろん完璧ではないが、それでもどこことなく当時の雰囲気が残っている。

何十万石の大大名の施政ではない。たかだか3000石である。「大字(おおあざ)」数個分の領地にすぎない(旧領・・・参照)。その領地の中心が蘆野宿である。おおきく立派な名所旧跡に慣れてしまった視点からは、あるいはなんにも見えてこないかもしれないが、ある種の落ち着きを伴った「ただずまい」を感じるかもしれない。その

「たたずまい」も画像に取ったら消えてしまいそうな、まるで脆弱なものにすぎないともいえる。しかし、功利的にいうなら、そこには、自分が作りえた事業を後継者に伝えるさいの、コツのようなものが潜んでいると。それが貴重に思えるのである。